# 須藤求馬をめぐって

## －四高蔵書と北陸人類学会，北陸史談会－

在　田　則　子

本学には第四高等学校から受け継ぎ今も光彩を放つ多くの資料がある。10万冊の四高蔵書もその一つである。四高蔵書には北条文庫等寄贈者の名を冠した特殊文庫が含まれる。その中で，分類別に配架されまとまった文庫は成していないが，同一の蔵書印が捺され，受け入れの日付から一括して寄贈されたと見られるコレクションがある。蔵書印には「阿波国住人須藤求馬」とある。四高和漢図書分類15門のうち自然科学系等を除く10門の調査

の結果，77点を確認した。目録は後日に譲るが，江戸期の写本を中心に貴重な資料が含まれている。

明治25年春，創立間もない第四高等中学校（明治27年第四高等学校と改称）で生徒が学校当局に，教官の質の向上を求め更迭を迫るという事件があった。この結果同年７月に異動があり，教授６名助教授５名が新たに迎えられた。この中に狩野亨吉，岡本金太郎らとともに須藤求馬（すどうもとめ）がいた。安政４年（1857）生まれであるから須藤は当時35歳である。須藤はやがて同志とはかり北陸人類学会を創設する。学会の活動は明治期の考古学史を語る上で注目され，学会が収集した考古学資料の一部は資料館に収蔵されている。

北陸人類学会員には阿閉政太郎がいる。彼の蔵書の一部は「阿閉文庫」となっている。阿閉は金沢教会に属し長老として教会を支え，私立金沢女学校（後の北陸学院）の設立に尽力し，キリスト教主義小学校・私立英和学校長であった人物である。

もうひとつ須藤の金沢での活動に，北陸史談会の創設がある。明治28年６月に四高の課外活動である「史談会」の発会式が行われる。発起人は須藤で，四高校内で70人の会員を擁した。史談会の活動はしばしば『北辰会雑誌』に取り上げられている。北陸史談会は四高史談会が発展したもので，北陸地方の文書史料を収集・研究し国史編纂に寄与することを目的とする。県内の教育関係者を中心に300名の会員が数えられる。同年11月には北陸人類学会と相次いで発会式が行われるが，当時の北国新聞には会場となった石川県尋常師範学校で，まず発起人総代として須藤が登壇し発会の趣意を述べたことが報じられている。

北陸史談会員の浦井鍠一郎は，明治25年７月須藤と同時に教授として四高に赴任し，昭和７年まで在職した。四高蔵書には彼の没後寄贈された「浦井文庫」がある。

ところで，明治29年６月に『神都名勝誌』が「神宮教会本部」から四高に寄贈されている。神宮教金沢本部は香林坊大神宮内にあり，そこには北陸人類学会の事務所が置かれていた。同学会の創立記念会とほとんどの例会はここで開かれている。会員が採集した考古学資料の多くは，後年四高に移されるが，当時はここに保管された。本部長は神官北山重正である。北山は須藤と並ぶ学会の中心人物でありながら彼に関する情報は断片的でしかない。北山と四高を結ぶ事項として，歌人でもある北山が参加した「伊豆の舎歌会」（『北辰会雑誌第七号』）とともに記憶しておきたい。

須藤は明治30年２月教授に昇進する。同年４月には四高創立10周年記念式が行われ，同月正八位に叙せられている。金沢で５年間を過ごし，同年８月に熊本五高に転任する。明治32年須藤が去って２年目の北陸人類学会の創立第四周年記念会には，同地から「熊本地方風俗談」を寄せている。

（金沢大学資料館）

「備品支給命令及受領票」
納人欄に「須藤求馬キフ」，日付は明治29年４月21日となっている。

寄贈本の印記には
「神武天皇即位
紀元二千五百
五十五年鐫此
印鈐図書以為
征清軍全勝之
紀念阿波国住
人須藤求馬」
とある。